

あとがき

Somatotopy は神経学用語集では、「体性〔機能〕局在（身体各部位に対応した中枢神経系での機能局在。Somatotopical localization/ representation とほぼ同義）」とある。この用語を聞けば、神経学に関わっている人は誰でもまずペンフィールドの運動野と体性感覚野の homunculus（小人間像）を思い浮かべるであろう。しかし、丹治 順先生と岩村吉晃先生の特集総説にあるように、運動野も体性感覚野も研究が進んで、体性局在はますます精緻になり、一筋縄ではいなくなっていて、再考せざるを得なくなった。それで、この特集企画が成立したのである。それにしても、お2人のベテラン神経生理学者の語り口は重厚で、しかも洗練されていて、さらにわかりやすい。重厚で洗練された文章と、吟味された図の選択の背景には、長い経験がうかがわれる。

大脳基底核や扁桃体、脊髄ももちろん中枢神経系であり、体性功能の局在があつて不思議はない。でも、情動発現に関わる扁桃体などでは体性局在を語るのは相当難しいらしいことが、湯浅茂樹先生の論文を読むとわかる。湯浅先生には「これでよいですか？」と執筆中の草稿を送っていただいた。扁桃体は現在の脳科学研究の中で最も注目されている脳部位の1つであり、個人的にもとても興味を持っている場所でもあったのですぐ読んでみたが、非常に優れた内容で勉強になり、すぐに「OK です」とメールした。私自身は、特集企画をした先生に締め切り前に、「これでよいですか？」と伺ったことなどはなく、せいぜい脱稿と同時に原稿をお送りすることぐらいしかしてこなかった。湯浅先生の学者らしい、謙虚な姿勢は論文内容と同じくらいに勉強になった。

南部 篤先生、伊佐 正先生はいずれも生理学研究所にご所属で、現在大活躍の神経生理学者で文部科学省の班会議などでご一緒することがある。講演と同様に、歯切れがよく、頭の回転のよさがぶんぶん匂うような論文である。

Somatotopy は臨床神経学の基底にある、最も大切な中枢神経の仕組みであると思う。この特集が基礎研究に携わる方だけでなく、臨床の立場にいる本誌の読者に役立つことを心からお祈りしたい。

（河村 満）

BRAIN and NERVE

（第61巻 第12号）

2009年12月1日（毎月1回1日発行）

定価 2,730 円〔本体 2,600 + 税 5 %（配送料実費）〕

〔2009 年、年ぎめ予約購読料 35,460 円・電子ジャーナル閲覧オプション付 46,100 円（配送料弊社負担）〕

E-mail: bn@igaku-shoin.co.jp

Web <http://www.igaku-shoin.co.jp/mag/bn>

発 行 株式会社 医学書院

代 表 者 金原 優

〒113-8719 東京都文京区本郷 1-28-23

電話 本誌編集室直通 (03) 3817-5701

（山内・小藤・山崎）

販売部直通 (03) 3817-5659・5660

ファクシミリ (03) 3815-7802

振替口座 00170-9-96693 番

印刷所 (株)アイワード (011) 241-9341

広告申込所 (株)ハイブリッジエージェンシー (03) 3814-0089

- Published by IGAKU-SHOIN Ltd., 1-28-23 Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo ©2009, Printed in Japan.
- 本誌に掲載する著作物の複製権・翻訳権・上映権・譲渡権・公衆送信権（送信可能化権を含む）は(株)医学書院が保有します。
- 〔JCOPY〕 (株)出版者著作権管理機構委託出版物
本誌の無断複写は著作権法上での例外を除き禁じられています。複写される場合は、そのつど事前に(株)出版者著作権管理機構（電話 03-3513-6969, FAX 03-3513-6979, info@jcopy.or.jp）の許諾を得てください。

編集顧問

生 田 房 弘
臺 弘
大 友 英 一
金 澤 一 郎
酒 田 英 夫
佐 野 圭 司
島 津 浩
杉 田 秀 夫
高 倉 公 朋
塚 田 裕 三
中 里 洋 一
彦 坂 興 秀
平 山 恵 造
藤 澤 浩四郎
真 柳 佳 昭
萬 年 甫
水 野 美 邦
柳 澤 信 夫

編集委員

岩 田 誠
（編集主幹）
石 塚 典 生
糸 山 泰 人
内 山 真一郎
梶 龍 兒
河 村 満
高 坂 新 一
作 田 学
辻 省 次
寺 本 明
中 込 忠 好
中 野 今 治
水 澤 英 洋
（五十音順）